庄内藩大工棟梁小林家旧蔵の慶 長期以前の木割書に見られる門 について —棟門 (2)—

A REPORT ON THE KIWARI-SYSTEMS OF THE GATE IN THE ARCHITECTURAL MANUAL BOOKS WRITTEN BEFORE THE KEICHO PERIOD —Munekado (2)—

永井康雄 —*1 飯淵康一 —*2
岡田 悟 —*3

Yasuo NAGAI —*1 Kouichi IIBUCHI —*2
Satoru OKADA —*3

キーワード：
木割書, 慶長期, 門, 木割, 棟門

Keywords:
Architectural manual book, Keicho period, Gate, Kiwari-system, Munekado

This report presents the kiwari-systems in the architectural manual books that were written before the early part of the 17th century. Those old records were handed down to the recent years by the KOBAYASHIS who were inaugurated as the DAIKU-TORYO that was the post for the authorized carpenters in SHONAI-HAN. Their descriptions are about the architectural techniques to all kinds of architectures and the architectural formalities, so they are important to study Japanese Middle Ages architectures. Among those architectural techniques, this report presents especially the kiwari-systems of the gate.

序

鶴岡市郷土資料館には庄内藩の大工棟梁家に伝来した「小林家資料」と呼ばれる大工文書が所蔵されている¹⁾。この中には慶長期以前の年紀を有する木割書類が多数含まれているが、これらの殆どは山形城主最上義光の大工頭であった小澤光祐に係るものである。それら木割書には門・宮・堂・塔・屋敷など多種多様な建物の木割が記されており、17世紀初頭前後における技術の変遷や中世の設計原理を検討する上での基礎的史料である。その内容の一部は既に報告した²⁾。ここでは前稿に引き続き下記の2史料³⁾に収録される棟門及び唐棟門の木割について報告したい。

史料4 (既報告の表1⁴⁾のNo.15)

表題: 門之もくろく/形式: 冊子形式/寸法: 縦250mm×横174mm/奥書: 慶長十九年甲寅霜月十八日 小沢若狭守光祐(花押)

史料7 (同No.25)

表題: なし(仮題: 諸木碎)/形式: 冊子形式/寸法: 縦224mm×横167mm/奥書: 慶長廿年十月十一日 小沢若狭守光祐(花押)

以下に棟門及び唐棟門の木割について述べることにするが、原文解説案に付した番号は筆者の注記であり、これは筆者作成の図中の数字とも一致している。

1 「門之もくろく・むねかとの事」(史料4)

史料4には、門に関して11項目の木割が収録されている。棟門の木割は最初に記されている⁵⁾。該当する記述の全文は以下の通りである(写真-1(1), (2)参照)。

「一 むねかとの事 九 (1) 一 間ひろさわ壱丈六尺也 (2) 一 柱のふとさハすんかそへ但壱尺八寸ニしてきくたきハすんかそへのわり也

(3) 一 柱の長さわほうたてうちのりとかふきの上とけはなしの下はと同かやし也 (4) 一 から石きの長さわすんかそへの柱のふとさ三本 (5) あつさわ三分かそへ (6) けはなしのたかさハ五分かそへ (7) あつさわ三分かそへ (8) ほうたてのひろさわ五分かそへ (9) あつさは二分かそへ (10) まくさわ三分かそへ四方也 (11) 一 かふきのたけわ五分かそへ (12) 下はハ柱のふとさをうらのめにてのへにする也 (13) 一 うつはりのたけ五分かそへ (14) 下ハ柱のふとさを三ツニわけて一ツ也 (15) 一 けたのたけハ五分かそへ (16) 下はハ柱三分一也 (17) 一 はふのひろさ五分かそへ (18) あつさハ柱の五分一也 (19) 一 のきの長さわ戸ひらひらきて木おいのうちニこまいのあつさほとすける也 (20) 又柱のつらぶきおいのうちのつらを三ツニわけて一ツ小うつはりの長さニつめをけたの中すミニする也 (21) 一 小の木の長さわおももの木の長さに木おひの下ハ一ツセはくすへし (22) たる木かうはいハ六寸也 (23) 一 ひゑんかうはいハはふに水たれあるやうニきハあわせてする也 (24) 一 たる木の下ハ柱のふとさ五分一也 (25) 一 たけハ二分まし (26) 木まいの下ハ一分半かそへ也 (27) 一 たけわ一分かそへ也 (28) 一 かすわおもに四本うつ也 (29) 一 むねの大斗壱尺六寸の柱のふとさほと也 (30) 一 ひち木のあつさわ大斗を三ツニわけて一ツ也 (31) 一 たけわ大斗のしかけしきめんとひち木の下ハたる木の下ハの大斗ゑのしかけあふ也 (32) 一 間うちハけたひち木をつくりつけニしてよし (33) たる木を間うちニ七本うつ也 (34) 一 こまわ六ツにする也 (35) 一 ひち木おちかゝりとたる木の下の大斗ゑのおちかゝりあふによつてそはの木ニたる木をうたぬ也 (36) 又けたの下ハときおひの下とかやおひのうちのうたぬとあわせていたすと申せともはふの水たれによつてはふののきをさける也 (37) 一 かやおひきをいの下ハたけ四方柱のふとさを三ツツ也 (38) 一 ついじのたかさ柱五本かさねて吉 (39) 下のはハ柱三本也 (40) 一 ゑぶりかまちの長さわ壱尺八寸の柱のふとさ仁本也 (41) 一 ゑぶりのたかさ壱尺八寸の柱のふとさ一本也 (42) 一 ゑぶりかまちのたけわ柱のふとさを三ツニわけて一ツ也 (43) 一 そののこりゑぶり也 (44) 一 ニツ分を又三ツニわけて一ツをくりニする也 (45) 一 ゑぶりののはなのかうはいハ六寸也 (46) 一 ゑぶりかまちのはなを六寸のこじりかやし (47) くもひち木

*1 東北大学大学院工学研究科 助教授・博士(工学)
(〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉06)

*2 東北大学大学院工学研究科 教授・工博

*3 共立女子短期大学生活科学科 教授・工博

*1 Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

*2 Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

*3 Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

写真-1(1)「門之もくろく・むねかとの事」

写真-3(1)

写真-2「門之もくろく・からむね門之事」

写真-1(2)

写真-3(2)「(諸木碎)・むねかとの事」

の長さわ小うつはりのはなの長さほと也 (48)― 戸ひらの板かすハ
かた戸ひらを六ツニわりて一まいを二ツニわりてかまちニする也
(49)― いたは五まい也 (50)― かまちのあつさわ二分かそへに二
分ましにして吉 (51)よこさんのかす六本也 (52)― 上下之さんの
あいわよこさんのふとさをうらのめにてのへる也 (53)― くわんぬ
木の長さわ戸ひらはほと也 (54)― かな物ハさんのめんうち也
(55)― はつそうの長さわかまち乃二まいめの四やうのかな物はな
さきほと二長さをする也」

平面規模は(1)で「間」を実寸(1丈6尺)で指定する。

柱太さは(2)で「すんかそへ」(10/100)と規定している。しかしこ
れには但し書きがあり、木碎(木割)は柱間の「すんかそへ」即ち1尺6
寸の柱太さを基準とするが、実際には柱太さを1尺8寸にするという
のである。各部材の殆どをこの「すんかそへ」の柱太さを基準とした

比例関係で定めているが、(40)から(44)の柄振板と柄振框のみ上述
の実際の柱太さを基準とした比例関係で定めている。

高さ方向は、(3)で冠木上端から蹴放下端迄を方立内法の長さ
と同じにすることによって柱の長さを定める。当木割では方立内法寸
法を明示しないが、(1)に柱間、(2)に柱太さ、(8)に方立幅が示さ
れているので、これらより方立内法寸法を求めることが出来る。し
かし、ここで問題となるのが柱太さを1尺8寸と1尺6寸の何れと考
えるかである。後述のように梁行きの軒長さ(木負迄の出)は扉幅を基
準として定めるが、扉幅は実際の方立内法寸法によって定まると考
えられるので、ここでの柱の長さも実際の方立内法寸法即ち1尺8寸
の柱太さに基づくものと一応解釈しておく。冠木より上部の高さに

(1) 間広さ(1丈6尺)	(2) 実際の柱の太さ(1尺8寸)	(40) 2 柄振框の長さ
(33) 垂木間内に7本	(2) $\times 10/100$ 柱の太さ	(41) $\times 1$ 柄振(全体)の高さ
(34) 木間は6寸		(42) $\times 1/3$ 柄振框の丈
		(43) $\times 2/3$ 柄振板の高さ
		(44) $\times 1/3$ 柄振板の繰り
(4) $\times 3$ 唐居敷の長さ		(3) 同返し 柱長さ(冠木の上から蹴放の下迄)
(5) $\times 3/10$ 唐居敷の厚さ		
(6) $\times 5/10$ 蹴放の高さ		
(7) $\times 3/10$ 蹴放の厚さ		
(8) $\times 5/10$ 方立の広さ		
(9) $\times 2/10$ 方立の厚さ		
(10) $\times 3/10$ 四方 楣		
(11) $\times 5/10$ 冠木の丈		
(12) $\sqrt{2}$ 冠木の下端		
(13) $\times 5/10$ うつはり<男梁>の丈		
(14) $\times 1/3$ うつはり<男梁>の下端		
(15) $\times 5/10$ 桁の丈		
(16) $\times 1/3$ 桁の下端		
(17) $\times 5/10$ 破風の広さ		
(18) $\times 1/5$ 破風の厚さ		
(24) $\times 1/5$ 垂木の下端	(25) $\times 1.2$ 垂木の丈	
(26) $\times 1.5/10$ 木舞の下端	(19) $\times 1$ 扉を開いて扉と木負との隙	
(27) $\times 1/10$ 木舞の丈		
(29) $\times 1$ 棟の大斗	(30) $\times 1/3$ 肘木の厚さ	
(37) $\times 1/3$ 茅負の下端		
(37) $\times 1/3$ 茅負の丈		
(37) $\times 1/3$ 木負の下端	(21) 主檐の長さより木負の下端1寸短く 小簷の長さ	
(37) $\times 1/3$ 木負の丈		
(38) $\times 5$ 築地の高さ		
(39) $\times 3$ 築地の下の幅		
(50) $\times (2/10) \times 1.2$ 扉の框の厚さ		
	片扉の幅 (49) $\times 1/6$ 扉の板 (48) $\times 1/2$ 框	
	横棧の太さ (52) $\sqrt{2}$ 上下の棧のあい	
	(54) めん内 金物	
	(55) 框より2枚目の扉板の四葉金物端先程 八双の長さ	
	(53) $\times 1$ 門の長さ	
	柱面から木負の内面迄 (20) $\times 1/3$ 柱面から小うつはり<女梁>の端迄	
	(20) $\times 2/3$ 柱面から桁中墨迄	
	(47) $\times 1$ 雲肘木の長さ	

図-1 「門之もくろく・むねかとの事」の木割

関する記述はないが、(20)で男梁上の桁の位置、(22)で地垂木の勾配が示されているので、これから棟木の位置は定まる。しかし、(31)(35)より地垂木の大斗への取り付け部分の下端は肘木の下端と同じ高さとなる。即ち、柱上の大斗は方斗状となって地垂木と肘木を受け、従って間内では棟木の下端に地垂木が取り付け形となる⁹⁾。

梁行きは、先ず(19)で木負内側の位置を定める。扉を開いてその端部から木舞の厚さ程の隙間を空けた位置に木負の内側がくるようにするという方法である。次に(20)で木負内側から柱面迄を3等分して柱面から1/3の所を「小うつはり」(女梁)の長さ(端部の位置)とし、同2/3の所を男梁上の桁の中墨とする。この様に扉の幅と木負との位置関係によって軒の長さを決める手法は江戸期一般の木割書にも見られ、当木割と同様に扉と木負内側に若干の隙間を空ける方法⁷⁾と両者を一致させる方法⁹⁾とがある。また、「小うつはり」(女梁)の長さとの桁の位置の決め方は江戸期の木割書でもこれと異なり様々で、木負内側から柱中墨迄を3等分して柱中墨から1/3の所を女梁端部、2/3の所を桁の中墨とする方法⁹⁾、木負内側から柱中墨迄を三ツ半に割って木負内側から一ツ目を桁中墨とする方法¹⁰⁾などである。

屋根については(21)で小簷の長さ¹¹⁾、(22)で地垂木の勾配を指定する。(23)は飛檐垂木の勾配に関する記述であるが、具体的な勾配は示さない。(36)の記述は桁と木負内側と茅負内側それぞれの下端を同一高さにするという意味で、これによって飛檐垂木の勾配が定まる。これと同一の手法を「大工雛形・新板武家雛形」では「六ツつれ」と呼んでいる¹²⁾。尚、側軒については(35)に肘木と地垂木の納まり方を理由に側軒には垂木を打たないとする記述があるが、その意味は不明である。

以上の検討を踏まえて史料の内容を纏めたのが図-1である。

2 「門之もくろく・からむね門之事」(史料4)

唐棟門の木割は史料4の5番目に記される。該当する記述の全文は以下の通りである(写真-2参照)。

「一 からむね門之事 (1)一 柱のふとさわ一寸かそへ (2)たかさわほうたて内のと大うつはりの中すミと石の口まで同かやし也 (3)一 かふきのたけ六分かそへ (4)あつさわ柱三分かそへ也 (5)一 たる木かうはいわ六寸かうはい也 (6)一 大斗ハ柱八分かそへ (7)ひち木のあつさわ大斗を三ツニわりて一ツ也 (8)一 たけわ三分まし也 (9)一 大斗のたかさわひち木の下ハ斗しりまでひち木のたけ一ツ也 (10)又たけ半分ふくむ也 (11)一 まき斗の長さわ大斗の大きさを六ツニわりて四ツ也 (12)一 こくちの方ハしきめん一ツセはくする也 (13)一 たかさわひち木のたけほと也 (14)一 さねひち木のたかさわひち木のたけ三ツニわりて二ツ也 (15)一 けんきやうわごみけんきやう也 (16)一 たる木のはなをきさむ也 (17)一 そのほかきくたきわむねかとト同物也」

当木割は、(17)に記されるように棟門の木割を基本としており、これと異なる箇所についての記述と考える。

柱太さは(1)で柱間の10/100とする。前項の棟門の様に実際の柱太さと木碌上の柱太さが併記されてはいない。従って当木割はこの柱太さを基準とするものと考えられる。

高さ方向は、(2)で方立内法の長さから柱の高さ(長さ)を決定する点は棟門と同じであるが、高さを大梁の中墨から石の口迄とする点で棟門の場合と異なる。

(6)から(14)までの記述は組物に関するものであり、既報告¹³⁾の「たけ一ツニたけなから」と呼ばれる唐様(禅宗様)斗拱の設計方法と基本的に同一である。

さて、当木割に記される門の形式であるが、(3)(4)に記される冠木の断面形状は、丈が柱太さの6分、厚さ(下端)が柱太さの3分の縦長であるから、冠木は柱に対して貫のように取り付けと考えられる。つまり「新撰大工雛形・門形二」¹⁴⁾所載の唐棟門のように、実際は柱が棟木近くまで延びて、柱頭に斗拱(大斗・肘木・巻斗・実肘木)を載せて棟木を受ける形式と考えられる。その他、(15)に「わごみけんきやう」という呼称が見える。「匠明・殿屋集」の主殿の項には「ワごめき」、「諸記集・武家記集」には「ワコメキ」とあって欄外に「^{オコメキ}辨木栗ノワコミ出スニ似タル也」と注記されている¹⁵⁾。

以上の検討を踏まえて史料の内容を纏めたのが図-2である。

3 「(諸木碌)・むねかとの事」(史料7)

史料7には種々の木割が37項目収録されている。棟門の木割は7番目に記されている。該当する記述の全文は以下の通りである(写真-3(1)、(2)参照)。

「一 むねかとの事 (1)ほうたて内りのりーちやう二尺のかとにつけての事也 (2)はしらハまにて一寸二分かそへ (3)たて内りのりハかふ木の上ハとけはなしの下のほうたてうちりのりとうちかやし也 (4)ほうたてハはしら五分かそへ (5)かふきあつさも柱五分かそへ (6)かふ木のくひめん一ツなり (7)うつはり下は三分一かそへ (8)たけハ五分かそへ (9)下うつはりも又内のつらハ八分すくやうにあつる也 (10)うつはりのなかさハはしらのつらよりけた中すミと下うつはりのはなときおいの内のつらと三ツにわるなり (11)くもひち木のなかさハ下うつはりと同 (12)かふきのなかさハまを四ツにわりて一ツつるかやうのはなにいたすなり (13)けたのなかさハかふ木よりけたの下は一ツおとすなり (14)たる木の下ははしら五分一なり (15)はふのひろさもはしら五分かそへ (16)たる木こうはい六寸也 (17)かやおい木のいの下はたる木一ツなから也 (18)かやおいのたけハ四分かそへ (19)ひゑんのなかさハおもきにかやをいの下は一ツセはくするなり (20)けはなしのたけハ六分かそへ (21)あつさ四分かそへ (22)ほうたてのあつさははしら五分一 (23)まくさハ四分一ほう (24)からいしきハあつさ三分かそへ (25)又四分かそへもま口なり (26)ひろさハほうたてのむねよりめん一ツいだす也 (27)ひゑんのこうはいたる木のつれ (28)又はふの三ツこほれ (29)戸ひらのをほんにつくりミアハセする也 (30)ひろさハかた戸びらを六まいにわりていた五まい (31)かまてハ一まい¹⁶⁾二ツにわりてはんふつににするなり (32)まーちやうハかりのかとにほうたてうちりのりとかふ木けはなしうちりのりとうちかやし (33)それよりちいさきかとハなをもたかくすへし (34)ーちやう一尺二尺のかとハかふ木一ツもひきくすへし (35)たゝしミあけのかとひしよの事 (36)ひち木のかとハかハる也 (37)いつれところのもやうによるへし (38)なをへ三だんにあるへし」

平面規模は(1)で方立内法を実寸(1丈2尺)で指定する。柱間寸法は明記されないが、柱太さは(2)で柱間の12/100¹⁸⁾、(4)で方立の幅を柱太さの5分と指定しているため、これから柱間寸法を求めると約15尺7寸8分9厘となる。

主要部材の多くを柱太さを基準とした比例関係で一次的に割り出す。また(6)と(26)の記述に見られるように柱の「めん」も寸法を決定する際の基準としているが、面取りの比率は記していない。ここで本柱が丸柱、角柱の何れであるかが問題となる。当史料と近似する内容の「大工斗墨曲尺之次第」では「柱径」と表現されていること、また丸柱にも関わらず実在しない「めん」を想定する設計法が見られること¹⁹⁾に鑑みて、本報告では本柱は丸柱であると解釈しておく。

高さ方向は、(3)で縦内法を冠木上端から蹴放下端迄として、これを方立内法の長さと同じとする。しかしこれは方立内法の規模が1丈2尺の場合であって、(32)(33)(34)では門の規模が違う場合の高さの調整方法を記している。因みに柱間をL、冠木上端から蹴放下

図-2 「門之もくろく・からむね門之事」の木割

図-3 「(諸木碎)・むねかとの事」の木割

端迄の高さをHとして、それぞれの場合におけるLに対するHの比率を求めると、方立内法が1丈2尺の場合は $H=0.76L$ 、柱間が1丈1尺から1丈2尺の場合は $H=0.832L$ 、柱間が1丈の場合は $H=0.892L$ 、柱間が1丈より小さい場合は $H=0.892L$ 以上、となる。また(35)以下は立地条

件の違いによって高さを調整すべき事を説いている¹⁸⁾。冠木より上部の高さに関する記述はないが、(10)で「うつはり」(男梁)上の桁の位置、(16)で地垂木の勾配を示しているので、前の史料4の「むねかとの事」と同様に棟木の位置を定める手法と考えられる¹⁹⁾。

梁行きに関する記述は(9)と(10)であるが、(9)は文意が通らない。(9)の直前は「うつはり」(男梁)の下端と丈の記述であるから、「下うつはりも」の後には「下うつはり」(女梁)の下端と丈の記述があり、これが脱落したと推定される。「又内のつら」以下の記述は扉を開いた時の木負との関係についての記述と考えられ、「新編武家雛形」の「のきの長サハとびらをひらきてきをひらうちに八分のつりあきあり」と同意の記述があったものと推定される²⁰⁾。(10)は分かり難い表現であるが、柱面から木負内側迄を3等分して柱面から1/3の所を「下うつはり」(女梁)の端部、2/3の所を桁の中墨にするという意味であり、前の史料4の「むねかとの事」と同一手法である²¹⁾。

(12)(13)は冠木と桁の長さについての記述である。冠木の桁方向の出を柱間の1/4、桁の長さは冠木より桁の下端分「おとす」というのであるが、これでは桁の方が冠木より短くなってしまふ。「おとす」は「出たす」の誤写であろう²²⁾。また「つるかやう」は冠木端の形状を示すと考えられるが、詳細は不明である。

その他、(17)の「木のい」は「木おい」の誤写であり、(22)の方立厚さ「五分一」は「大工斗墨曲尺之次第」では「十分の四」とする。

以上の検討を踏まえて史料の内容を纏めたのが図-3である。

結

本稿では庄内藩の大工棟梁小林家が旧蔵した木割書の中から「門之もくろく」(史料4)と「諸木砕」(史料7)に記される棟門の木割2例と唐棟門の木割1例について報告した。史料4の唐棟門は史料4の棟門の木割に準拠しているので、主として両史料の棟門の設計手法の概要を比較し、以下に示す。

平面規模は史料4の棟門は柱間を実寸(1丈6尺)で、史料7の棟門は方立内法を実寸(1丈2尺)で指定する。

柱太さは史料4の棟門と唐棟門が柱間の10/100、史料7の棟門が柱間の12/100である。史料4の棟門の木割は基準となる柱太さとは別に実際の柱太さを実寸(1尺8寸)で指定する点に大きな特徴がある。両史料とも柱太さを基準とした比例関係で諸部材の寸法を決定するが、史料7では「めん」も用いる。

高さについては両史料とも方立内法を基準とするが、縦内法は史料4の棟門では冠木下端から蹴放下端迄、史料4の唐棟門では大梁中墨から石の口迄、史料7の棟門では冠木上端から蹴放下端迄とする。また史料7では門の規模の違いによる高さの決め方を示している。

梁行きの決め方は、両史料とも、ほぼ同一の手法である。開いた扉との位置関係によって木負の位置を定め、柱面から木負内側迄を3等分して柱面から1/3の所を女梁の端部、2/3の所を桁中墨とする。

屋根については、両史料とも地垂木の勾配と小簷の長さを指定する。史料4の棟門では、これらに加えて桁と木負内側と茅負内側それぞれの下端の高さを揃えることによって結果的に飛檐垂木の勾配を定める。この手法は「大工雛形・新板武家雛形二」に記されるものと同一である。

以上、前報告と併せて江戸初期の木割書に記された棟門5例(内1例は唐棟門)の木割について報告した。その結果、近世初頭における多様な木割法の存在が明らかとなった。今後は、他の形式の門の木割についても報告したい。

附記

本報告は科学研究費補助金(基盤研究(C)(2)、課題番号14550632)を受けて行った研究成果の一部である。

註

- 1) 小林家については、永井康雄・飯淵康一「庄内藩の普請・作事組織について」(日本建築学会計画系論文集, 第468号, 1995年)参照。
- 2) 神社建築については鳥居、三間社、一間社等、住宅建築については主殿(広間)、馬屋、色代、遠侍等、建築細部として斗拱の木割について報告した(日本建築学会技術報告集, 第1, 3, 5, 6, 7, 8, 11, 16号)。
- 3) 史料番号は前報告、永井康雄・飯淵康一・岡田悟「庄内藩大工棟梁小林家旧蔵の慶長期以前の木割書に見られる門について一棟門(1)」(日本建築学会技術報告集, 第17号, 2003年)に倣う。
- 4) 永井康雄・飯淵康一「庄内藩大工棟梁小林家旧蔵の慶長期以前の木割書とそれらに見られる斗拱の木割」(日本建築学会技術報告集, 第1号, 1995年)の表1は、小林家旧蔵史料の内、慶長期以前の年紀を有する木割書類及びそれらとほぼ同時期と推定されるものについて、書名・史料の寸法等・奥書・内容を纏めたものである。
- 5) 「一むねかとの事」の下に「九」と記されているが、既報告の表1に示した史料の内、No.14, 15(本報告の史料4), 16, 17, 18, 19, 20, 21, 25(本報告の史料7)の最初の項目の下にも同様に記されている。従って「九」は「九冊の内」という意味と考えられる。
- 6) この様な例に東福寺六波羅門(鎌倉前期建築, 京都市東山区所在)がある。「重要文化財東福寺六波羅門並びに東司修理工事報告書」(京都府教育庁指導部文化財保護課, 昭和53年)では「化粧棟木えの地種の仕口は他に例のないもの」と報告されている。また、当史料の(32)は肘木を「けた」(棟木と解される)から作り出して良いという意味と考えられるが、六波羅門の場合は肘木と棟木は別材である。
- 7) 「大工雛形・新板武家雛形二」(享保2年(1717), 須原屋茂兵衛板)では「のきの長サハとびらをひらきて。きをい乃うちに。八分のつりあきあり」とする。この他、「大工割方雑集」(天和元年(1681)頃, 東北大学蔵)、「建仁寺派家伝書・門集」(17世紀後半から18世紀初頭頃, 東京都立中央図書館蔵)など。
- 8) 「諸記集・門記集」(17世紀後半から18世紀初頭, 静嘉堂文庫蔵)では「扉ヲ開テ木覆内表ニ可用」、「匠明・門記集」(18世紀初頭, 東京大学蔵)では「同梁行簷長サハ闊ヒラキテ木覆内面ニアウヘシ」とする。
- 9) 「建仁寺派家伝書・門集」では「桁の間ハ扉ひらきて木負の内つらに八分の釣明きして木負の内ノつらノ柱中墨まで三つに割割つめハ雲板のふみ留下梁の長さに当て式つめを桁の中墨に当」とする。「諸記集・門記集」では「其内三間割二分ヲ桁ノ間真ニ可用梁長サ真ヨリ桁厚サツ出雲板長サ柱三本並小梁長サ唐居敷ト同事也」、「匠明・門記集」では「其内三間ニ割二分ヲ桁ノ間真ニ可用梁長サハ真ヨリ桁厚サツ出シ」雲板長サハ柱三本ナラべ但小梁長サ唐居敷ト同クスベシ」とあるが、木負内側迄の長さは柱中墨から柱面からなのか不明。
- 10) 「大工雛形・新板武家雛形二」では「けたのみどころはきをいのうちと柱なかずミを三ツ半にわいてきをひの内より壱ツ入てけたの中ずミにさだむべし」とする。
- 11) 小簷の長さを何処から何処迄とするかが明示されていないので、ここでは木負の外側下角から茅負の外側下角迄と仮定した。
- 12) 「けたの下ばと。きをい乃下ばと。かやをいの下ばも。あふやうにいたすを。六ツつれと申也。」とある。本史料の(19)では「木おいのうち(木負の内)」が基準となっているので、(36)の「きおひの下ハ(木負の下端)」も木負の内側下角と解釈しておく。
- 13) 註4) 拙稿。
- 14) 木暮甚七, 宝暦9年(1759), 須原屋茂兵衛板。
- 15) 「日本建築古典叢書9 近世建築書一絵様雛形」(大龍堂書店, 1991年)に所収される「鬼板懸魚割」(池上延世, 静嘉堂文庫蔵)と「(高橋吉規 小割図)」(高橋家蔵)には、それぞれ「輪籠キ懸魚」「わかめきけんきやう」として図が載せられているが、何れも所謂燕懸魚である。
- 16) 当史料と近似する内容の「孫七覚書」(内藤昌, 西村真孝「木割書『孫七覚書』について」日本建築学会東海支部研究報告, 昭和44年)と「大工斗墨曲尺之次第」(「明治前日本建築技術史」日本學士院編, 昭和36年所収)ではそれぞれ「間にて数え」、「柱間の十分の一・三」とする。
- 17) 渡辺勝彦, 他「いわゆる『木砕之注文』(寿彰覚書)における木割体系の特質」(日本建築学会計画系論文報告集第378号, 昭和62年)。
- 18) 「孫七覚書」では「但ミアケノカトヒラチノカトハカハル也イスレモコロニヨル也」、「大工斗墨曲尺之次第」では「但し戸無し門平地の門は変わるなり孰れも所によるへし」と記されている。尚、当史料(38)の「三だん」は「算段」の意か。
- 19) 当史料には記されない桁の寸法が「孫七覚書」には記されている。
- 20) 「大工斗墨曲尺之次第」にはこれに関する記述が見られないが、「孫七覚書」では「戸を開き木負の内つらに8分すくよう」とある。関連して(29)も文意が通らないが、(28)と(30)に続くべき記述が前後して筆写されていると考えられる。
- 21) 「大工斗墨曲尺之次第」では「うつ梁の長さ 柱真より木負内面に至る間を三分し、柱真より第一が下うつ梁の鼻とし、第二を桁の真とする」とあり、柱面からではなく「柱真」とする点が異なる。
- 22) 「大工斗墨曲尺之次第」では「冠木木口より桁の下端一つ長くする」とある。

[2003年4月17日原稿受理 2003年7月29日採用決定]